

《JICA だより》

## 動き出した「ケニア林業育苗訓練プロジェクト」

林 久 晴

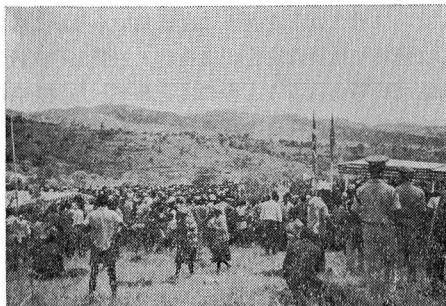
「ケニア林業育苗訓練プロジェクト（以下「プロジェクト」と略称）が発足したのは昨年11月26日であり、その概要は前号でも紹介したが、その後本格的な活動に向けて準備がなされ、この4月には予定された専門家の現地着任も終えた。

本プロジェクトは、我が国がアフリカで行う最初の林業プロジェクトでもあり、後に続くアフリカ関係プロジェクトに大きな指針をもたらすものとして各方面から注目されているが、この4月現地を訪れる機会を得たので、現地の概況等を報告させて頂くこととしたい。

### 1. アフリカでも一年中気候は涼しい

プロジェクトが置かれている場所は、ケニアの首都ナイロビから約25km西北にあるムグガ（メイン・サイト）、同じく約180km東方にあるキツイ（サブ・サイト）の2箇所である。

これらのうちナイロビとムグガは、いずれも赤道直下（南緯1度）にあるにもかかわらず、標高がナイロビは1,700m、ムグガは2,000mと高いことから、年間平均気温が13°C～20°Cと涼しく、一年を通して変化がなく、湿度も低いため、快適な気候で



ケニア、ムランガで行われた植樹祭に集まった住民たち（61.4.18）

あり、クーラーも暖房機もいらなさそうである。キツイは標高が約1,100mと前二者に比べて低いため、年間平均気温は18～22°Cとやや温度は高い。

また、年間雨量は、ムグガで約950mmと比較的多いのに対し、キツイは半乾燥地に属し年間雨量250mm以下の地域が多くなっているが、キツイ市は約800mmの雨量がある。しかしながら、雨量は年によ

HAYASHI, Hisaharu: First Step on the Project for Social Forestry in Kenya  
国際協力事業団林業水産開発協力部

って著しい変化がみられるのが特徴的であり、例えばムグガでは、1977年1,366mm、1984年580mmという記録がある。

専門家の活動拠点となるナイロビは、緑も割合に多く、ヨーロッパとの交流も盛んなことから物質的な不自由もあまりなさそうで、林業プロジェクトとしては比較的恵まれた環境にあるといえよう。

## 2. 2年間はプロジェクトの基礎作り

現在着任されている長期専門家は、渡辺桂チーフ・アドバイザー（前 JICA 林業水産開発協力部長）、柳原保邦（前林野庁計画課）、堀正彦（前林野庁林産課）の3氏で、着任早々から相手側実施機関との接渉、プロジェクト・サイトの下準備等に精力的に活動を開始されている。

このプロジェクトは、ケニアの植林の推進に資するため、環境天然資源省を相手方としケニア農業研究所林業研究部（現在は農業・畜産開発省の下に置かれているが、林業研究部は近くケニア林業研究所として独立し、環境天然資源省の下へ移管されることが決まっている）を技術移転の対象者として、林業用苗木の育苗技術を中心とした訓練及び若干の研究協力を行うことを目的としている。プロジェクトの協力期間は、先ず第1フェーズの2年間に準備期間、その後第2フェーズとして本格的な協力を5年間実施することとされている。

従って当面の2年間はいわばプロジェクトのルール敷きが課題であるが、その内容は、①円滑な実施体制の確立、②プロジェクト運営計画の立案、③苗畑の造成、④パイロット・フォレストの造成、⑤無償資金協力による研修施設、研究施設等の建設等々、盛りだくさんなものがあつた渡辺チーフ・アドバイザー以下専門家の方々のご尽力に期待するところが極めて大きい。

## 3. 大きいケニア側の期待

私共が訪れた4月は、丁度「大雨期」の終りごろということもあつて、ナイロビは花と緑が豊かにみられ、日本で抱いていたアフリカのイメージとはおよそ程遠いように見えた。しかし、ナイロビから南の方へ車で15分も走って低地に行くとすぐサバンナが現われ、木は矮性化したものがまばらにしか見られず、その変化は急激である。その一方で、標高の高いところでは、木も結構種類が多い。主なものは、アカシア類（*A. abyssinica*, *A. elatior*, *A. senegal* など）、*Acrocarpus fraxinifolius*, *Albizia coriaria*, *Cassia siamea*, *Terminalia prunioides* 等々、外来種ではユーカリ、果樹ではカシュー・ナッツ、マンゴ、マカダミア・ナッツといったものが多くみられた。しかし、大面積に林分を形成するというものは少なく、小面積の群落を形成し、あるいは町並木、または単木的に存在するというもので、乾季での自然条件の厳しさを思わせた。

訪問中、4月18日から1週間はケニアの緑化週間ということで、18日には大統領が出席して植樹祭が開かれ私たちもご招待頂き出席した。ナイロビから約1時間10分北にあるムランガという村で開かれた植樹祭には、近郷から数は定かでないが何千と

いう人が集まった。政府からも大統領、農業大臣、環境天然資源省事務次官はじめ多数が出席し、このうち大統領はこの緑化週間に住民1人が1本の木を植えるように呼びかけるなど、植林に対する熱意の程が伺われた。

このように国をあげて植林に取り組んでいる中で、本プロジェクトに対する期待は極めて大きく、このことはプロジェクトの準備に対する迅速な対応ぶりにも表われている。

本プロジェクトの成功のために関係者各位のご理解とご支援をお願いする次第です。

## ■海外情報

### 第三国研修に「地域林業開発」を採択 ——アセアン・太平洋人造り協力で——

昭和59年7月にジャカルタで開催されたアセアン拡大外相会議の席上、アセアン・太平洋協力事業のテーマとして「人造り」が取上げられて討議された。翌年1月に開かれた高級事務レベル会合ではこの「人造り」協力が地域における緊急行動計画と中・長期行動計画とに二分して実施されることになり、特定された協力の優先7分野中には農林漁業に関する課題が含まれていた。準備作業を経て、同年6月下旬の第二回高級事務レベル会合では各国より提案されたプロジェクト内容の検討が行われ、緊急行動計画としては資金協力が可能で、しかも1985～1986年中に実施できる課題34件について合意が得られた。わが国が参加表明したのはこのうちの15件であったが、その1つとしてタイ国の同意により第三国研修として表記の「地域林業開発」を実施することになった。

本年4月9日に行われた実施協議の内容によると、研修はタイ国の造林研究訓練プロジェクトの施設と現在タイ国が実施しているコミュニティ・フォレストリーの現場を利用して講義と現地検討会を行った後、参加各国の社会的背景やコミュニティ・フォレストリーの必要性をもとにしたモデルプランを作るというもので、実施期間は本年11月16日から12月18日までの約1か月間となっている。

参加者の募集はアセアン・太平洋諸国16か国より10～12名で、このほかにタイ国より5名の人が参加できる。応募資格は大学卒もしくは同等の学力を有し、コミュニティ・フォレストリー開発や造林事業に3年以上の経験を持つ40才以下の人ということになっているが、外交チャンネルを通しての応募だけに、どのような人が集って来るかが楽しみである。

実施に必要な拠出金の大半は国際協力事業団の研修費によるが総額で約32,000ドルあまりとなっており、大枠は参加者の旅費と研修に必要な諸経費とに分けられている。このほか、わが国はこの事業に助言と協力指導をするため、社会経済と地域林業に関する技術的助言者を派遣することになっている。

いずれにしても、タイ国の王室林野局はもとよりアセアン事務局をはじめ、関係者の深い関心が今からもたれているところである。  
(内村悦三)